

(7) きく

ア 各病害虫の防除

褐斑病

黒さび病

黒斑病

白絹病

白さび病

根頭がんしゅ病

えそ病(TSWV)、茎えそ病(CSNV)

わい化病(CSVd)

アブラムシ類

オオタバコガ

マメハモグリバエ

アザミウマ類

コナジラミ類

ハダニ類

ネグサレセンチュウ類

ハガレセンチュウ

ハスモンヨトウ

シロイチモジヨトウ

カメムシ類

ア 各病害虫の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

褐斑病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病ごく初期から薬剤を、7～10日おきに3～4回施用(散布)する。

黒さび病

(判断、防除に関する措置)

- 1 5～6月及び秋が冷涼で雨が多いと発生が多い。

(耕種的・物理的防除)

- 1 下葉が発病したら取り除く。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 育苗期から蕾のときまで、薬剤を10～14日おきに施用(散布)する。

黒斑病

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病ごく初期から薬剤を、7～10日おきに3～4回施用(散布)する。

白絹病

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病株は直ちに抜き取る。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 [共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)により土壌くん蒸剤で土壌消毒する。
- 2 薬剤を施用(散布)する。

白さび病

(耕種的・物理的防除)

- 1 抵抗性品種を栽培する。
- 2 下葉が発病したら取り除き薬剤散布する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。
- 2 育苗期から蕾のときまで薬剤を10～14日おきに施用(散布)する。

根頭がんしゅ病

(耕種的・物理的防除)

- 1 無病苗を無病地に植え付ける。

えそ病(TSWV)、茎えそ病(CSNV)

(耕種的・物理的防除)

- 1 ウイルスの伝染源となるため、ほ場周辺に感染しやすい野菜や草花を植え付けない。
 - 2 ほ場周辺の雑草はアザミウマ類の飛来源及びウイルスの伝染源となるため除草し、ほ場衛生に努める。
 - 3 アザミウマ類は花粉を好みそれを餌として増殖するため、草花などをハウス内に持ち込まない。
 - 4 発病株は直ちに抜き取り処分する。
 - 5 媒介昆虫であるアザミウマ類の防除をする([本項の「アザミウマ類の防除」](#)を参照)。
- ※主にミカンキイロアザミウマにより伝搬する。

※着蕾期以前は病徴を示さない場合が多い。
※品種によって発病程度に差がある。

わい化病(CSVd)

(判断、防除に関する措置)

- 1 ウイロイドの1種 CSVdが感染し、葉の小型化や節間の短縮によるわい化などの症状が発生する。
 - 2 品種によって発病程度に差がある。
- ※土壌や昆虫による伝染は報告されていない。

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病株は直ちに抜き取る。
- 2 無病苗を利用する。発病株やその周辺の株を翌年の親株にしない。
- 3 無病徴感染株の汁液により伝染するため、親株の管理に使用する刃物の消毒を徹底する ([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

アブラムシ類

(耕種的・物理的防除)

- 1 育苗時からアブラムシ類の発生に注意する。黄色粘着テープを施設の出入口や開口部の近く、若しくは苗の近くにつるし、有翅成虫が飛来していないか確認する。
- 2 近紫外線除去フィルムは成虫の飛来を減らす効果があるので、これらのフィルムを施設の外張りやトンネルに使用する。
- 3 施設では、側窓や天窓などの開口部に寒冷紗や防虫ネット等を張り、成虫の飛来を防ぐ。
- 4 マルチをする場合は、シルバーポリマルチなど忌避効果のあるものを使用する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 気門封鎖剤を散布する。
- 2 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用法の項](#)を参照する。
- 3 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

オオタバコガ

・[共通防除の章のオオタバコガの防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 食害や糞の近くには幼虫がいる可能性が高いので、発見に努め、見つけ次第捕殺する。
- 2 新芽や花蕾には卵や若齢幼虫がいることが多い。摘心した側枝や蕾はほ場外に持ち出し処分する。
- 3 防虫網などにより施設内への成虫の飛び込みを防止する。
- 4 本種に対しては、防蛾用黄色蛍光灯の夜間点灯の効果が高い。これは、ハスモンヨトウやシロイチモジヨトウなど他の夜行性の蛾にも効果がある。
- 5 蛹化は土中で行われる。発生の多かったほ場では、ロータリーをかけたり、ほ場を冠水したりすることで、土中の蛹を死滅させる。
- 6 交信かく乱剤を活用した防除を行う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 2 交信かく乱剤を活用する。
- 3 BT剤を散布する。
- 4 発生初期から薬剤を施用(散布)する。農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。

マメハモグリバエ

・[共通防除の章のハモグリバエ類の防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 薬剤防除のみでは防除が困難であるため、耕種的・物理的防除法も組み合わせて実施する。
- 2 成虫は黄色に強く誘引される性質があるので、黄色粘着板を用いて発生をモニタリングし、初期防除を徹底する。

- 成虫の侵入を防止するため、施設開口部には防虫ネットを設置する。また、紫外線カットフィルムの利用も有効である。
- ほ場周辺部の雑草などにも寄生するので、特にキク科雑草を除去する等、ほ場衛生に努める。
- 収穫後の被害残さは発生源となるので、土中に埋設するか、ビニール被覆し熱処理を行う。
- 収穫終了後、地表の蛹の防除対策として、施設を密閉し土壌表面をビニール等で被覆することにより蒸し込む。水分のある植物がない状態で最低地温 40℃以上が数日続けば、蛹はほぼ死滅し、羽化成虫も 1 日で死滅する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

アザミウマ類

-
- [共通防除の章のアザミウマ類の防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 施設内への侵入を防ぐため、開口部に防虫ネットを展張する。育苗期の被覆も有効である。ほぼ完全に侵入を阻止するには、目合い 0.4mm 以下の防虫ネットが必要である。
- ほ場周辺の雑草を除去する。
- 粘着テープにより成虫を誘殺する。本種は特に青色に誘引される。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 生物農薬を活用する。

※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。

※アザミウマの生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。

- キルパーを用いた病害虫まん延防止 ([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項の「キルパーを用いた前作の古株枯死、病害虫まん延防止」](#)を参照) ([農薬登録情報](#))
- 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

コナジラミ類

-
- [共通防除の章のコナジラミの防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 特にタバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しているので、以下に挙げる予防策を基本とした総合防除を行う。
- 寄生範囲が広いので、ほ場内外の雑草防除などほ場衛生に努める。
- 施設では成虫の侵入防止を徹底する。0.4mm 目以下の防虫ネット、紫外線カットフィルム、反射資材等の利用が有効である。
- 夏期には露地においても発生が多くなるため、秋期より栽培(定植)の始まる作型では、施設内への成虫の侵入防止対策が特に重要である。
- 育苗期の防除に努め、コナジラミ類が寄生していない苗を定植する。鉢物など、栽培に関係のない植物は、施設内に持ち込まない。
- 連作する場合には、作と作の間に施設内に植物が存在しない期間を設け、コナジラミ類がリレーされることを避ける。
- 施設での発生予察のために黄色粘着テープを使用する場合は、侵入防止を徹底したうえで、施設の出入口や側窓付近に張り、定期的に変換する。
- 作物上に寄生したコナジラミの施設外への逃亡・拡散を防止するため、収穫後の残さは、キルパーの処理や施設の密閉(蒸し込み)により、枯死、乾燥させた上で処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 早期発見、早期防除に重点を置く。薬剤効果に差があるので、両種の区別を的確に行う。薬剤散布を行うに当たっては、葉裏に寄生している幼虫、蛹にも必ず薬剤がかかるよう丁寧に十分な量を散布する。さらに、薬剤が株全体によく到達するよう下葉の処分を早期に行うなど工夫する。
- 気門封鎖剤を散布する。
- キルパーを用いた前作の古株枯死 ([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項の「キルパーを用いた前作の古株枯死、病害虫まん延防止」](#)を参照) ([農薬登録情報](#))
- 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

ハダニ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 気門封鎖剤を散布する。
- 2 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用方法的項](#)を参照する。
- 3 土壌処理剤 ([共通防除の章の資材・苗床・本ばの消毒の項](#)を参照する。)
- 4 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

ネグサレセンチュウ類

・[共通防除の章の資材・苗床・本ばの消毒の項](#)を参照する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#) [【ネグサレセンチュウ】](#)・[【センチュウ類】](#)

- 1 薬剤を施用（散布）する。

ハガレセンチュウ

(判断、防除に関する措置)

- 1 多雨の年に多発しやすい。

(耕種的・物理的防除)

- 1 健全株から採穂する。
- 2 被害葉は除去する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#) [【ハガレセンチュウ】](#)・[【センチュウ類】](#)

- 1 薬剤を施用（散布）する。

ハスモンヨトウ

・[共通防除の章のハスモンヨトウの防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 早期発見に努め、卵塊や分散前の若齢幼虫を捕殺する。
- 2 施設などでは開口部に防虫網を設置し、成虫の侵入を防止する。
- 3 交信かく乱剤を活用した防除を行う。
- 4 施設栽培においては、栽培終了後に密閉処理を行う。
- 5 作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#) [【ハスモンヨトウ】](#)・[【ヨトウムシ類】](#)

- 1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 2 交信かく乱剤を活用する。
- 3 BT 剤を散布する。
- 4 発生初期から薬剤を施用（散布）する。農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。

シロイチモジヨトウ

・[共通防除の章のシロイチモジヨトウの防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 成虫は長距離移動する可能性があるため、周辺の発生ほ場からの飛来も十分考えられる。したがって、施設などでは防虫網を設置し、成虫の侵入を防止する。
- 2 交信かく乱剤を活用した防除を行う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 本種は薬剤抵抗性が発達しており有効薬剤は非常に少なく、また幼虫は2齢になると、ねぎなどでは葉に穴を空け葉内に潜り込んで食害するため、薬剤散布を実施する場合も散布適期が非常に短い。そのため、ほ場での発生をよく観察し、幼虫のふ化に合わせて薬剤散布を実施しなければならない。

- 2 交信かく乱剤を活用する。
- 3 若齢幼虫期のうちに、薬剤を施用（散布）する。

カメムシ類

（判断、防除に関する措置）

- 1 成虫と幼虫が茎葉を吸汁する。成長点付近が吸汁されて硬化し、葉の奇形や茎が湾曲する。

（薬剤防除） [農業登録情報](#) [【カメムシ類】](#)・[【ウスモンミドリカスミカメ】](#)

- 1 薬剤を施用（散布）する。